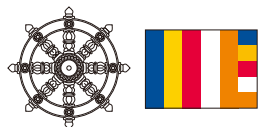


ZENBUTSU

全仏



No.
595

仏暦2556年12月
[2013年]



2014年 京都で開催するInterFaith 駅伝の件で京都市長を表敬訪問
(左から本会総務部長奈良慈徹、門川大作京都市長、本会事務総長関崎幸孝、InterFaith日本実行委員松山大耕)

目次	第42回 全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会 開催	2
	第2回 宗派代議員会議、都道府県仏教会・仏教団体代議員会議 開催	4
	第47回 「仏教伝道文化賞」贈呈式	5
	第60回 全日本仏教婦人連盟記念大会 開催	5
	第19世タイ王国長老ソムデット・プラ・ニャナサンバラ法王猊下 百歳記念集会参加報告 日比野郁皓	6
	東京都仏教連合会主催 宮城県被災地域仏教会訪問団 参加	6
	中国佛教協会訪日代表团表敬訪問	7
	第42回 全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会 大会宣言文	8

公益財団法人

第四十二回 全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会開催 大会テーマ…宗教と環境―自然との共生

◆全日本仏教徒会議

去る十月十六日～十七日の日程で、真言宗の聖地である高野山内各所を会場に、和歌山県仏教会・高野山真言宗・全日本仏教会の共催により標記大会が開催された。

全日本仏教徒会議は、全日本仏教会が財団設立以前の昭和二十七年十二月に発足した世界仏教徒日本連盟の主催により、六十年前の昭和二十八年八月二十七日から三日間の行程で、第一回全日本仏教徒会議が高野山で開催された。当時の仏教徒会議では、教育教化、社会福祉、国際問題等、二十六議案の討議が行われ、仏教界そのものに関わる問題について、宗派を超越して集まった僧侶たちが熱心に議論を展開した。以後この会議において、仏旗の制定や仏暦の決定等、現在でも私たちが用いる重

要な案件を協議し決議したとの記録が残っている。

近年は、僧侶だけの会議ではなく、檀信徒や一般の方々も交え、全ての参加者が楽しめるよう趣向を凝らしたイベントと共に、社会問題や宗教界全体に関わる問題をテーマに協議を行なっている。

第四十二回となる本大会においては、「宗教と環境―自然との共生」をテーマに、豊かな自然環境の中にある高野山を会場とし、宗教者と一般の方々を交え、基調講演やシンポジウム等を通して採択された大会宣言を広く社会に向けて発信した。

その他、僧侶だけでなく、広く一般の方々も共に参加できる企画として、和歌山県下寺院と高野山真言宗僧侶の協力により、各宗派の座禅を体験できる坐禅会、写経の指導、法話会、そして宗教空間



都道府県仏教会・仏教団体代議員会議

である高野山内を体感できる森林セラピー、ナイトツアー、声明ライブ等が両日共に山内各所で行なわれ、高野山を訪れた全ての方々を楽しみながら仏教に触れる機会となった。なお、別会場では本会加盟団体による宗派代議員会議と、都道府県仏教会・仏教団体代議員会議も併催され、今後の仏教界や本会の事業展開についても話し合われた。

◆開会式（十六日）

本大会は二日間の日程で行なわれた。本会場となる高野山大学松

下講堂黎明館ホールでは、午後零時三十分より開会式が行われ、約五百名の方々に参加した。

開式の辞は、元本会会長の松長有慶高野山真言宗管長が務め、「本大会が仏教徒の主張を全世界に発信できる大きな機会になるであろう」と述べた。

仏教徒の歌の斉唱の後、本会会長の半田孝淳天台座主は、「混沌とした世界情勢と同時に地球環境を考えなければならない時期にきている。経済優先の考え方を改め、新しい社会を実現できるように意義深い協議を本大会で行なって欲しい」と挨拶を述べた。

開会式終了後、同会場では引き続き「全日本仏教徒のつどい」が開催され、各宗派有志による御詠歌やコーラスを中心とした合同法会が行なわれ参加者を楽しませた。

◆懇親会（十六日）

午後六時三十分からは、高野山大学体育館に会場を移し、懇親会が開催された。この懇親会には、本会加盟団体をはじめ、協賛団体

を含む約二百名が参加し、立食形式で行なわれた。

ここでは、本大会の実行委員長である添田隆昭高野山真言宗務総長の開会の辞と、来賓として本会副会長の宮林昭彦日韓仏教交流協議会会長の挨拶に続き、小林正道本会理事長の乾杯の発声により懇親会は和やかに開会した。

また、余興として地元から伊都橋本地方で伝統的な盆踊りである「やっちょんまかせ」と高知県で伝統的な「よさこい音頭」を融合した踊りや、かつらぎ町四郷地区に古くから伝わる「千両踊り」の大鼓パフォーマンスが披露され、会場は大きな拍手に包まれた。

◆シンポジウム（十七日）

大会二日目となる十七日は、本会場である松下講堂黎明館ホールにおいて、本大会のテーマである「宗教と環境―自然との共生」についてのシンポジウムが午前十時より行なわれ、約三百名が参加した。開会にあたり、まず松長管長による記念法話が行なわれ、「人間

も動植物も命は同等であり、私たち人間中心から一切衆生の世界観へ転換しなければならぬ。世界的に環境汚染が深刻になっている現在、日本仏教の中で言う一切衆生とは、石にさえ命があるという考え方を要する。これは古来より日本にあった神道の考え方が基本になつていると考えるが、この日本仏教が指す一切のものが平等に成仏するといった考え方を世界に向けて発信することこそが、環境問題解決の大きな道筋になるであろう」と述べた。

続いて中部大学教授の武田邦彦氏が、科学者からの視点で自然環境をどのように考察しているかといった内容の基調講演を行ない、「私たちはメディアが取り上げる環境危機を考えもせずそのまま鵜呑みにしている。人間が及ぼす環境への影響はごくわずかである」という持論を展開し、「しかし科学は事実の実証は可能だが、進むべき道は宗教者や哲学者が意見することで、正しい方向へ進んでゆく」と結論づけた。

続いて行なわれたシンポジウムでは、竹村牧男東洋大学学長がコーディネーターを務め、パネリストに基調講演を行なった武田氏に、大河内秀人氏（浄土宗見樹院・寿光院住職）と、村上保壽氏（高野山大学名誉教授）が加わり意見交換が行なわれた。

ここでは、自然環境を生命環境と捉えて考えると、自然界の生命の循環、即ち命の繋がりを重視することが重要であり、人間の誰もが持つているエゴイズムを克服することで人と自然との共生が実現する。この点を仏教の教義を活かし現代社会に広めることが重要であるとまとめられた。



大会宣言文を読み上げる添田実行委員長

◆閉会式（十七日）

シンポジウム終了後、同会場では引き続き閉会式が行なわれ、大会副総裁の北河原公敬本会副会長による開会の辞と、横田南嶺本会副会長の挨拶に続き、添田実行委員長から大会宣言文が読み上げられ（本文P8参照）、満場一致で採択された。最後に、次回開催の担当となる愛媛県仏教会へ全日本仏教会会旗継承が行なわれ、萩野映明本会副会長から御木徳久愛媛県仏教会会長へ会旗が手渡された。次回、第四十三回全日本仏教徒会議は、平成二十七年に愛媛県松山市で開催する予定である。



会旗継承
（萩野本会副会長から御木愛媛県仏教会会長へ）

第二回 宗派代議員会、都道府県仏教

会・仏教団体代議員会議 開催

開催日時 十月十六日午後二時〜午後四時三十分

開催場所 高野山大学第三会議室、高野山真言宗事務所大会議室

第四十二回全日本仏教会徒会議和歌山・高野山大会に併催する形で、標記会議を開催した。

◆第二回宗派代議員会議

代議員総数四十三名中、出席代議員九名、代理出席一名、委任出席三十三名で開催。互選により議長に中江代議員（融通念佛宗）、副議長に一宮代議員（念法真教）を選出した。

当日出席者は次の通り
川合歳明（天台眞盛宗）、田中利典（金峯山修験本宗）、吉田明良（和宗）、草野貞男（孝道教団）、一宮良範（念法眞教）、井上真英（眞言宗須磨寺派）、吉村増亮（東寺眞言宗）、村主祥瑞（眞言宗中山寺派）、中江慈光（融通念佛宗）、牟田清樹（瀬川大秀代理・眞言宗御室派）、森田俊朗（担当理事・和宗）、小林正道（理事長・浄土宗）

以上順不同、敬称略
以下、各議題について代議員より出された意見を列記する。

◎宗派・都道府県仏教会・仏教団体にとつての公益性を伴った活動とは何か
・一般のを対象に講演会を開催、法律や憲法のシンポジウムや子育て広場

等を開催している。

・宗教法人の公益性を国が問うている。また全日本仏教会（以下、全仏）の存在意義について、例えば全仏が発表した原発の宣言文を、委員会等立ち上げて国や社会に仏教者としての発信をする等のフォローをすることこそ全仏にとつて意義のあることではないか。

・全仏は連合体ゆえに意見がまとまらない実情があるが、それでは世間には受け入れられない。仏教界の活動が一般の方にもわかるような説明の検討を望む。

◎東日本大震災の支援や政府への要請活動について

・日頃からの地域との接触が大事と考え、地元警察と避難所の締結をしたり役所の災害対策課と連携をとったりしている。

◎伝統仏教界の広報誌「全仏」を全国七万力寺へ配布する企画について

・できる限り協力をする。
・内容を精査し送付してほしい。

◎その他

・代議員会議となつてより発言がしやすくなった。

◆第二回都道府県仏教会、仏教団体代議員会議

代議員総数四十三名中、出席代議員十二名、代理出席五名、委任出席二十六名で開催。互選により議長に御木代議員（愛媛県仏教会）、副議長に橋代議員（岐阜県仏教会）を選出した。

当日出席者は次の通り

工藤裕雅（青森県仏教会）、松本一浩（茨城県仏教会）、新倉典生（東京都仏教連合会）、和田博祐（新潟県仏教会）、橋 正信（岐阜県仏教会）、吉田清順（京都仏教会）、篠原法傳（兵庫県仏教会）、柳瀬智明（和歌山県仏教会）、正田哲寿（鳥取県仏教連合会）、御木徳久（愛媛県仏教会）、末廣久美（公益社団法人全日本仏教婦人連盟）、高橋隆岱（一般社団法人仏教情報センター）、鈴木英彰（塚田宗雄代理・栃木県仏教会）、金子嘉広（木村盛雄代理・一般財団法人埼玉県佛教会）、和田大雅（井澤孝一代理・神奈川県仏教会） 佐々木昭道（前阪良憲代理・滋賀県仏教会）、伊東政浩（村山博雅代理・全日本仏教青年会） 杉山令憲（担当理事・岐阜県仏教会）、小林正道（理事長・浄土宗）

以上順不同、敬称略
以下、各議題について代議員より出された意見を列記する。

◎宗派・都道府県仏教会・仏教団体にとつての公益性を伴った活動とは何か

・仏教者として、慈悲の心を隔てなく地域に与えていくことが、まさに公益に繋がっていくと思われる。また、全仏への所属意識を高めるために、まず宗派との関わりを強く持つていただき、全仏の活動を周知いただくことで、寺院の意識が変わっていくと思われる。

◎東日本大震災の支援や政府への要請活動について

・義捐金の寄託について県仏教会独自で行ってきたが、全仏が行なっている活動を知っていれば、寄託先に選択肢があったかと思われる。震災支援情報の周知を望む。

◎伝統仏教界の広報誌「全仏」を全国七万力寺へ配布する企画について

・県下の地区仏教会に対し、「全仏」配布を通じて、情報を発信することは、超宗派で活動する地区仏教会や県仏教会への理解にも繋がると思うので、是非推進していただきたい。

◎その他

・全仏と各県仏教会とがさらに繋がりを有するようにしていただきたい。
・仏教界内で公益性が非常に高い活動をしている団体に対し、全仏から助成金などを出し、支援できる仕組みを作りたい。

・全仏で時期ごとにテーマを決め、県仏教会や各寺院で共有できるスローガンを掲げていただきたい。

第四十七回 「仏教伝道文化賞」贈呈式

公益財団法人仏教伝道協会主催の「仏教伝道文化賞」は、仏教伝道文化への貢献者に毎年贈られている。

十月二日、港区の仏教伝道センタービルにて贈呈式が開催され、本会より関崎幸孝事務総長が出席した。

今年、一般財団法人多山報恩会に「仏教伝道文化賞」が、長倉伯博師に「仏教伝道文化賞」沼田奨励賞」が、福山諦法名誉理事長よりそれぞれに贈られた。

多山報恩会の創始者は、元広島電鉄社長の故・多山恒次郎氏で、氏は私財の全てを提供して財団を設立し、教育・文化・福祉・国際交流等、多方面にわたり貢献された。その精神を受け継いだ報恩会の会員が現在にまで継承してきた仏教伝道活動が評価されたものである。

また長倉伯博師は、鹿児島にお



いて医療の緩和ケアネットワークを設立し、ビハラーを実践する中で二十数年にわたり患者の方々寄り添ってきた活動が評価された。贈呈式後の祝賀会では、不二川公勝築地本願寺前事務長の乾杯の発声で約百名の参会者とともに祝杯をあげた。

その後、登世岡浩治師、早島理師がそれぞれ祝辞を述べ、終始和やかな雰囲気の中、参会者同士が熱心に歓談をする中で有意義な時間が経過し、閉会となった。

第六十回 全日本仏教 婦人連盟記念大会開催

十月二十五日、パレスホテル東京にて、公益社団法人全日本仏教婦人連盟第六十回記念大会が開催され、約百九十名が参集した。本会からは小林正道理事長、関崎幸孝事務総長が出席した。

第一部では、浄土宗大本山善光寺大本願法主の鷹司誓玉名誉会長を導師に、全日本仏教尼僧法団の有志を式衆とした東日本大震災犠牲者並びに全日本仏教婦人連盟物故者追善供養法要が厳修された。

法要終了後、鷹司名誉会長の垂示があり、「六十年の長きにわたり婦人連盟の先達が多方面における福祉活動を継続してきたことは、誠に尊いこと。私たちはその精神を受け継ぎ、仏様の慈愛の心で実践していきたい」と、全ての人々の心と共に平和な世界を実現したいと決意を述べた。

次に、本年新たに就任された東伏見具子会長の挨拶があり、来賓挨拶として小林正道本会理事長、

岡野鄰子孝道教団二世副統理から祝辞が述べられた。

次いで会員の写経活動により集められた写経千五百巻と光明施療院にオートクレーヴ（医療用消毒機）の目録が、末廣久美理事長より安田暎胤公益財団法人国際仏教興隆協会理事長に贈られた。

第二部では末廣久美理事長がさるなる公益性のために研鑽を重ねてまいりたいと挨拶され、続いて杉谷義純WCRP日本委員会理事長の発声で乾杯し、祝宴が開始された。

清興ではオペラ歌手である中丸三千繪さんの清らかな歌声が披露され、暫し心洗われる時間が経過した。その後、和やかな雰囲気のうち懇親会が閉じられた。



東伏見具子会長の挨拶

第十九世タイ王国長老ソムデット・プラ・ニヤナサンバラ法王猊下百歳記念集会参加報告

WFB人道支援委員会委員長 日比野郁皓

この度、第十九世タイ王国長老ソムデット・プラ・ニヤナサンバラ法王猊下の百歳の誕生をお祝いする記念集会在WFB本部を中心に開催された。長老は、WFBの後援者として尽力され、仏教の原理に基づいた清く強い師のご指導は、各国仏教における上座部、大乘、真言といった違いにとわれず、広く世界に影響を与えている。記念集会開催にあたり「二一世紀の仏教徒の模範」というテーマのもと、様々な分科会が開催された。



ソムデット・プラ・ニヤナサンバラ法王猊下

記念集会上立ち、一日早朝よりWFB本部前においてWFB各国代表が、百十九人の托鉢僧に布施をした。続いてWFB本部において開会式が行われ、上座部仏教、大乘仏教、日本仏教の順序で法要が行われ、法要に先立ち岡野隣子氏（孝道教団第二世副統理）により日本舞踊が奉納された。分科会は、各国からの代表者による基調講演があり、佐藤良純大正大学名誉教授が「自然環境と仏教」をテーマに基調講演した。また、二日午前には「仏教界はいかにして協力できるか」をテーマに四人のパネリストが講演し、互いの違いを尊重し、調和が大切であることが強調された。日本からは国友憲昭師が、東日本大震災、京都市洪水被害の救援等の経験から、アジアの洪水などの現状を述べ、世界サイズの救援チームを提言した。午後の討論会では「環境問題の解決促進における仏教の役割」をテーマに丸山弘子氏（早稲田環境塾講師）他三名が講演し、丸山氏は仏教に内在する自然保護思想と華嚴経にあるインドラ網の観点から、地球のエコシステム、相互扶助の関係を述べた。この度の集会は、WFB後援者である長老の功績を称えるとともに、今後のWFBの活動の方向性を示す有意義な集会となった。

東京都仏教連合会主催
宮城県被災地域仏教会訪問団参加

去る十月二十八日・二十九日に標記訪問団が結成され、総勢十五名のうち本会から三名が参加した。この訪問団結成に至る経緯としては、まず東京都仏教連合会（以下・東仏）に設置している災害救援基金の用途について、今後も被災地に対して継続的に支援していくことが理事会で了承された。そこで、今後どのような支援が必要なのかを導くために、被災された地域仏教会に赴いて現地の状況を理解することを目的に結成された。訪問団は二日間の日程の中で、佐々木一十郎名取市長と面会し、山田一眞東仏理事長から改めて佐々木市長に義捐金を手交。そして、いまだに津波の爪痕が残る閑上地区と荒浜地区を視察して慰霊法要を厳修した。また、仙台市内のホテルにて、（一社）仙台仏教会、名取市仏教会、石巻市仏教会、塩釜連合寺院、多賀城市寺院の有志の方々と、被災地域の現況と今後の復興について交流会が設けられた。（一社）仙台仏教会及び塩釜連合

寺院では、仮設住宅地への傾聴活動を行ったが、宗教活動が行政の規制に阻まれた地域と、規制がない地域があったとの報告があった。一方で他の地域仏教会からの報告では、行政の復興策がまとまらない。離壇の増加。各自坊の自力復興の限界。地域住民の肉体的精神的な限界。物質的・財政的・精神的のどれをとっても支援がおぼつかないとの報告。その中で「せめて墓地だけでも先に復興しないと、ますます離壇が進む」「どんな形でも構わないから寺院再建に向けた援助がほしい」との発言があった。この度の訪問団結成の成果について、新倉典生東仏事務局長から「今回の訪問で改めてさまざま状況を理解することができた。東仏として今後どのようなご支援ができるのか考へたい」とのコメントをいただいた。



被災地域仏教会との交流会

中国佛教協会 訪日代表団表敬訪問

十月十一日、中国佛教協会訪日代表団の釈常蔵団長（中国佛教協会副秘書長、北京市靈光寺住職）、張琳副団長（中国佛教協会副秘書長）をはじめ、計六名の団員が本会を表敬訪問し、小林正道理事長、関崎幸孝事務総長、他事務総局長が応接した。

釈団長は「中国と日本は、約千五百年に渡る仏教交流を通じ、宗派の違いはあっても、供にお釈迦様の教えを實踐する家族のような近い存在である」と挨拶を述べ、小林理事長から表敬訪問への感謝と、東日本大震災発生直後に寄せていただいた浄財と、今年八月、福島を主会場に全日本仏教青年会主催で開催された「国際仏教徒青年交換プログラム」への助成金を寄せていただいたことへの御礼を述べた。最後に両国のより一層の仏教交流に期待を寄せ記念撮影をして本会をあとにした。



事務総局録事

十月（十六日～三十一日）

- 十六日 ▼ 第四十二回全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会開催（十七日）（高野山大学黎明館他）
- ▼ 第二回宗派代議員会議開催（高野山大学）
- ▼ 第二回都道府県仏教会・仏教団体代議員会議開催（高野山真言宗事務所）
- 十八日 ▼ 日本テンプルヴァン井上氏来局
- 二十一日 ▼ 神道扶桑教第六世宗野史生 管長襲任を祝う会出席（帝國ホテル）
- ▼ D A T 新藤氏来局
- 二十二日 ▼ 稲場圭信大阪大学大学院准教授来局
- ▼ W C R P 青年部会石川清章 幹事長他来局
- ▼ 日本テンプルヴァン井上氏来局
- ▼ 局内会議
- 二十三日 ▼ G R A P H（株）北川氏他来局
- ▼ オメガコム五十嵐氏来局
- ▼ 第十回東日本大震災支援検討会議開催
- 二十四日 ▼ 第二十八回教団行政責任者研修会参加（グランヴィア京都）
- ▼ 財団創立六十周年記念事業 第三回準備委員会開催
- ▼ 無料法律相談室
- 二十五日 ▼ 第六十回全日本仏教婦人連盟記念大会出席（パレスホテル）
- ▼ 藤田幸久参議院議員来局

- ▼ 木村太郎衆議院議員秘書 村晴男氏来局
- 二十八日 ▼ 東京都仏教連合会主催宮城 県被災地域仏教会訪問団参加（二十九日）（名取市他）
- 二十九日 ▼ 第八回総務財政審議会開催
- 三十日 ▼ 第六十七回宗教法入審議会 出席（東海大学校友会館）
- ▼ 部落解放同盟中央実行委員会 第三十二回拡大委員会出席（松本治一郎記念館）
- 三十一日 ▼ 真言宗御室派仁和寺訪問
- ▼ 聖ドミニコ女子修道院訪問
- ▼ （一財）京都陸上競技協会田中セツ子会長訪問
- ▼ 中外日報京都総社訪問
- ▼ D O T・吉田氏他と面談（京都駅前）
- ▼ 立正佼成会京都教会普門館 会場下見
- ▼ 狭山事件の再審を求める市民集会・デモ行進（日比谷野外音楽堂・銀座）

十一月（一日～十五日）

- 一日 ▼ 門川大作京都市長表敬訪問（京都市役所）
- ▼ 第一回 Interfaith 日本実行委員会開催（立正佼成会京都教会普門館）
- 五日 ▼ 全国青少年教化協議会創立五十周年記念式典・祝賀会及び第三十七回正力松太郎賞表彰式出席（帝國ホテル）
- 六日 ▼ 東京都仏教連合会主催寺院防災対策セミナー出席（損保ジャパン本社ビル）
- ▼ 世界経済フォーラム会長シユワブ博士の叙勲を祝う会参加（帝國ホテル）

- 国ホテル）
- ▼ B N N 企画委員会出席（庭野野和財団）
- 七日 ▼ 真宗高田派宗務院訪問
- 八日 ▼ （公財）新日本宗教団体連合会主催「第二回現代社会と宗教の自由・公開講座」参加（セレニティホール）
- 九日 ▼ 宗務行政百周年記念の集い参加（國學院大學）
- 十二日 ▼ 局内会議
- 十三日 ▼ 真言宗御室派立部祐道門跡晋山式参加（仁和寺）
- 十四日 ▼ 文化庁宗務課訪問
- ▼ 年末調整等説明会参加（メルパルク東京）
- 十五日 ▼ G R A P H（株）若狭氏来局
- ▼ 加藤尚彦元衆議院議員来局
- ▼ 長谷川本会顧問弁護士と打合せ（事務総局会議室）
- ▼ 無料法律相談室

賛助会員入会者ご紹介

【団体会員】

株式会社 便利堂（美術印刷・企画）
日本空輸株式会社（旅行・貨物）

【個人会員】

鳥居 邦夫（東京都）

（順不同・敬称略）

ご入会いただき、誠に有難うございました。

引き続き賛助会員のご入会をお待ちしております。賛助会員の要項・申込みの流れ及び申込書のダウンロードなど、賛助会員の入会に関しては、本会HPをご覧ください。

大会宣言文

第四十二回 全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会

大会テーマ「宗教と環境——自然との共生——」

私達のいのちは自然環境と密接不可分の関係にあります。私達人間の心が垢ればそれに従い環境は垢れ、逆に環境が調和を保てば、それに従い私達の心も落ち着き、朗らかになっています。

第二次大戦以後、驚異的な科学技術の進歩により私達は物質的に豊かな生活を享受してきました。しかしその原資は地球上の有限な資源であるにもかかわらずそれらを湯水の如く消費し、枯渇の危機を招き、あまつさえ近未来には海底資源まで触手を延ばそうとしています。

最近発表されたIPCC（気候変動に関する政府間パネル）報告書でも地球温暖化の進行は人為的原因によることが強く調されています。自然環境にも危機的な状況をもたらし、オゾン層の破壊、海面の上昇、干魘、ゲリラ豪雨等により世界的に甚大な被害を蒙っているのは、その顕著な例であります。また急速な工業化による深刻な大気汚染が常態化し、人々の健康を蝕む事態をも招いています。

私達は、東日本大震災という未曾有の大惨事を経験いたしました。とりわけ原子力発電所の放射能汚染の影響もあり、被災地の復旧は遅々として進まず、大自然の脅威の前に如何に人間が無力かを痛感させられました。この大惨事は日頃の生活を根底から見直し、物質的に豊かな生活よりもさらに大切なものがあることに気づかせてくれる、自然からの警告であります。石油、石炭などの化石燃料も、過去に存在したいのちが悠久の時を経て私達に恩恵を与えてくれております。しかしそれらは有限です。私達の時代だけで枯渇させることなく、未来にも残し伝えねばなりません。

便利で快適な生活を求めるのも根源的な生命力としての欲であります。しかしその欲を我欲にとどめず、質を変え他の命を生かし、大切にするために使う利他の行動が現代に求められています。

私達は自然から大きな恩恵を受けているのも事実であります。古来より日本人は森羅万象の中に聖なるものを見出し「神・仏」として崇拜し、保護し、共存してきました。その智慧を共有する仏教各派が釈尊の教えの下に一致団結し、叡智の科学とも手を取り合い、日本ひいては世界中にその思想を発信し、さらなる環境破壊を阻止すべく自然との共生の実現を誓い大会宣言と致します。

平成二十五年十月十七日

第四十二回 全日本仏教徒会議 和歌山・高野山大会 実行委員会